『日本石仏小譜』と小川琢治博士

－臼杵石仏との関連を中心にして－

仲　嶺　真　信

1）はじめに

かつて筆者は，主に大正期の臼杵石仏に関する研究[1]をまとめたが，正しく大正期は，日本人による国内外に存在する仏像及び石仏研究の黎明期に当たることを指摘した。その中において，濱田耕作博士を中心とした京都帝国大学の調査研究は最も優れていた。今管見ではこう考えている。ちょうど濱田博士の研究をその最高峰に例え，その周りにもいくつかの峰々が聳えている光景を思い描いて見るならば，まず，特徴をなす峰が三つ見えてくる。一は，雄大に聳えている主峰，二は，その前方から横手に広がり並立しようとする峰，さらに三は，それらの前方で緩やかに延びる峰。一が濱田耕作氏，二が小野玄妙氏，三が小川琢治氏である。

この一と二については，拙論において詳しく触れたが，後の三については，一部紹介し言及もしたが，『日本石仏小譜』（以下『小譜』図１）については，未調査のため保留のままであった。つまり，拙論と一部重複するが，小川氏の「九州の石仏　一・二」[2]は，佐賀・鵜殿と大分・稙田の石仏を重点的に紹介し，臼杵石仏については極めて簡単に触れているだけであった。ただし，大正３年前後の美術史及び仏像研究の実態を鑑みれば，本格的とは決していい難いが，先駆的な学術報告書となっていた，と指摘できよう。ちなみに，伊東忠太博士が，初めて雲岡石窟の報告を行ったのが，明治39（1906）年[3]。また大谷探検隊を敦煌に派遣したのが明治44年。その成果は大正４（1915）年発刊の『西域考古図譜』に収録。一方，大村西崖『支那美術史彫塑篇』[4]・『東洋美術大観　第15　彫刻部』[5]はそれぞれ大正６・７（1917･18）年の発刊。さらに大正13年に刊行された常磐大定・関野貞『支那仏教史蹟』は，明治39年から調査が開始されていて継続中。この様な状況から見ると，小川氏の論文と図譜の発表は，まさに画期的で快挙でもある。

そもそも豊後石仏について論じようとするならば，前掲小川論文はもちろん，稀覯本『小譜』は看過できない。これは，日本の石仏研究史における記念碑的な図版集と言うことができよう。特に臼杵石仏の研究においては，最も初期の基礎的資料として重要である。もっとも，一般的には濱田耕作『豊後磨崖石仏の研究』[6]（大正13年。以下『豊後磨崖仏』）所載の写真資料が最古と考えられている。ところが，『小譜』は，小川氏が御母堂を供養するための出版という，極めて私的な性格のものとはいえ，現存する写真資料としては，撮影時期が最も古い大正３年のもの。まさに『小譜』は，日本の石仏研究の黎明期に登場した，極めて重大な意義を秘めた稀有な図版集といえる。ちなみに，喜田貞吉博士は，小川氏自らが題簽に書名を揮毫された『日

本精華第九輯　豊州摩崖石仏』（以下『豊州摩崖仏』図２）において次のように指摘されている。すなわち，序言（大正３年３月）「先年京大教授小川理学博士，親しく之を蹟査して其の写真を知友間に頒たる。ここに於て学界始めて此の豊富なる遺品の存在を知るを得たり。而も其の頒布の範囲広からず，なほ之を知るもの多からざるなり。云々[7]（句読点筆者加筆）」。文中の知友間に頒布した写真が，すなわち『小譜』である。残念ながら，国会図書館には所蔵されていないし，京都大学にもたった二部のみ架蔵されているだけ[8]。したがって，以下に本論において筆者は，詳しくその写真資料を分析しながら，臼杵石仏研究史上の意義について検討し，さらに再評価したいと考えている。

２）小川琢治博士と石仏研究

まずは，小川琢治氏（1870-1941／図３）のプロフィールについて，人名辞典（事典）に基づき確認を行い，さらに石仏研究との関わりについて調べて見よう。

『明治人名辞典Ⅲ　上巻』による小川琢治氏に関する事柄は次のようである。

すなわち「君は理学博士なり。旧紀州藩士浅井篤の二男，明治三年五月二十八日生る。明治二十四年五月旧田辺藩士小川駒橘の養嗣子となる。二十九年帝国大学理科大学地質科を卒業し，理学士となり尋て大学院に入る。三十一年農商務技師に任ぜらる。先是二十九年東京地質学協会発行地学雑誌の編輯に従事す。台湾島の我領土となるや同協会の委嘱を受け，同島の地理を調査し台湾諸島誌の著あり。三十三年一月仏国巴里万国博覧会審査員となり仏国に差遣せられ後，墺国維也納大学地質学校教授ジウス氏に就て研学する。三十四年五月帰朝し，正七位に叙せられ農商務省地質調査所技師たり。方今従五位に陞叙し京都帝国大学文科大学教授の職に在り。（京都上京区今出川通寺町西一七九）[9]」（句読点・下線部の加筆，旧字体の新字体への変更は筆者）。

ところで，大正期に臼杵在住であった小城長郎氏は次のように記している。すなわち　「又京大教授小川博士は，此聖塔の古趣を帯びたるを殊に愛せられ，逝きし両親の墓標にせばやと態々此地の石工に命じ同型のもの二基を模造させ，遥々京都に送つて東山の先塋に建設せられた[10]」と記している。そこで，前記の人名辞典と小城氏の示す内容を検討すると，小川琢治氏が旧田辺藩士小川駒橘の養嗣子という事実と『小譜』所収の図版一の示す内容は興味深い。つまり，小川氏は，両親の墓標とするために臼杵の五輪塔を模造して，京都の黒谷岡崎の墓地に建立された（図４）。したがって，図版一の墓誌銘中の「小川駒橘妻方子白井氏」は，小川氏の御母堂に当たる。墓誌は続く「大正甲寅九月八日没享年六十一」。偶然にも大正甲寅（３）年は，小川氏が「九州の石仏　一」（９月）「九州の石仏　二」（10月）を発表された時でもあった。しかも，この年日本は大変な時期を迎えていた。８月にはドイツに対して宣戦布告，第一次世界大戦へ突入している。この前年の大正２年８月，小川氏は別府にて開催された夏期講習を縁に，初めて臼杵石仏を訪問，以後３回に渡り詳しく調査を実施。ともあれ臼杵中尾台の五

輪塔を両親の墓標のデザインに選ばれ，また『小譜』が，御母堂の供養のために身近な者のみに配布されたことからも，石仏に対する深甚なる敬愛の念が窺われる。

もう一つ別の記載を拾って見よう。『コンサイス日本人名事典』によると，すなわち「1870-1941（明治３－昭和16）年。明治・大正昭和の地質学者。㊥和歌山県。㊚東大。1897（明治30）年地質調査技師となる。日本各地の地質調査に従い，西南日本の地質図・説明書を作成。1901年山崎直方とともにウィーンの万国地質学会議に出席。1902年中国各地を視察。1908年に京大に新設された地理学講座の教授となり，翌年理博。1921（大正10）年理学部地質学鉱物学科の主任教授。地球学団を組織・主催し，後進の育成に努める。1930（昭和５）年定年退官。構造地質や自然地理に関する多数の論文を発表した。学士院会員。その子に冶金学者小川芳樹，東洋史学者貝塚茂樹，物理学者湯川秀樹，中国文学者小川環樹がいる。㊟『人文地理学研究』『支那歴史地理研究』1928年，『地質現象の新解釈』1929年[11]。（一部「年」，「句読点」など筆者加筆）」。なお，参考までに『東方学　54　輯』所収「座談会　先学を語る ── 小川琢治博士 ── 」[12]と『小川琢治博士還暦記念　史学地理学論叢』のあることを挙げておく。前者には，石仏研究及び『小譜』のことについては一言も言及されておらず，末尾に博士の略歴のみを付している。後者には，冒頭に明治22年５月から昭和５年５月に至る間の博士の詳しい著作表を掲載している。これは，主に本来の専門の地理学・地質学関連の諸著作で構成されているが，その中に唯一「九州の石仏（前掲）」も掲載されており，まさに特殊な取扱いを受けている。ちなみに後者には，小川博士に関連のある方々25名の執筆論文を収録している[13]。

要するに，前掲の二つの辞典（事典）でも確認された様に，小川氏は純然たる地理学・地質学者であって，仏教美術の本格的研究者ではない。素朴な疑問が浮かぶ。なぜ，石仏の研究に関わったのだろうか。それについては，すでに拙文[14]においても言及したことだが，明治43年に小川・濱田両氏が，初めて龍門石窟を訪問したことが契機となっている。故あってその経緯は，濱田門下の水野清一・長廣敏雄著『龍門石窟』の序文に詳述されている。ちなみに，序文の前に「謹みて文学博士濱田耕作先生にこの書をささぐ」という題が見られ，さらにその裏に数行の刊行の趣旨が続く。すなわち「昭和十三年七月二十五日，恩師文学博士濱田耕作先生が歿くなられた。先生は東方文化研究所の前理事であり，商議員であり，またわれわれの指導員でもあられた。この研究所創立當初から，かはらず研究所の正常な発展に努力され，終始われわれの研究を鞭撻された。ここに先生を記念し，つつしんでこの書をささげる所以である。[15]」と明記されている。本来この書物には，濱田氏によって序文が記されるはずであった。しかし，実際は次のような経緯によって小川琢治博士が記述されたのであった。やや長くなるが，必要であるので引用を許されたい。

「序　龍門石窟の研究の一篇は，水野・長廣両君の昭和十一年四月の現地踏査に研究の功を積むこと五年にして漸く完成を見たもので，濱田耕作博士の指導の下に業を始められ，その結果を報告する前に易簀せられたから，博士の序文を載せて出版すべき筈の本篇を公にすることを得なんだのは両君の大に遺憾とせられるのは当然の訳である。私は明治四十三年九月青陵博

士と共に洛陽小旅行を試みて，伊闕に遊び石窟を観たから，博士に代って本篇に序言を冠せよとの両君の希望を空しくする能はぬので，我々両人の当時の追憶談を兼ねて，この小旅行の喚起した観想を略述してその責を塞ぐことにする。(中略)。北京に於ける見学後に一行三君と離れて河南旅行を試みた濱田君と私とは稍々目的を異にし，龍門は山海経にある禹父鯀の入水伝説がある場処であり，リヒトホーフエンが龍門石灰岩を古生層々位上重要視されたこともあり，一石三鳥を狙っていたのであった。(中略)。此の旅行に當り，石灰岩に含まれた古生代化石を発見する能はなんだが，峡谷を成した伊闕の地形を観たり，渕瀬の変化を想像したりなどした印象は今なお歴々と記憶に留まっている。(中略)。摩崖石仏に関して私の初めて知ったのは学生中に故関野（貞）博士の示された印度のRockcut templeと称する彫刻の写真で，ガンダーラなる地名はその後に聞いた位で，明治三十五年北京で伊東（忠太）博士が山西の古い木造建築を発見せられたとの話を耳にした時には，曲阜聖廟の漢碑や泰山の摩崖碑から考古学の興趣を味ふたのみで，未だ仏像の芸術的引力を感受してはいなんだ。然るに奉先寺の唐高宗の造った大石仏の巍然たるを望見して，内蒙古多倫諾爾で巨仏像を観た時に東大寺盧舎那仏に比して美術的価値の低きを感じたのと雲壌の差を認め，又潛渓寺に続く賓陽洞その他の北魏時代諸洞の諸仏が法隆寺以外に見ない様式であるのを覚ったのである。我々二人が伊闕両崖を観る為に費した時間は僅かに半日で，十分詳細に箇々の諸仏像や菩薩羅漢などを区別して，その芸術上の観賞に入る暇は全くなかった。蓮華洞の迦葉像などは一瞥した位で，後にシャワヌの写真を故妻木直良君と共に観た時に，同氏からその手についた錫杖の頭と同じ形式のものが越中立山剣峰々頭に三角点を設くる際，発掘して，上野帝室博物館に蔵せられていることを語られ，当時の朧ろ気な記憶を喚び起こして龍門石窟を開いた北魏時代の登山用の杖の実物が北越の高山を開発せんとした修験者にも使用されたことが明らかとなったのはこの時の触目の感興を新たにした。又た此の旅行から五年を経て，豊後で大分臼杵等の石仏を発見して，初めて日本摩崖仏の立派な作品の存在を世界に紹介し得たのも此の体験に負うたのである。特に大分岩屋寺の諸像は天平時代の前後に国分寺が創設された頃に，洛陽長安交通の盛んに行われて，大陸の仏教芸術の伝来したことを雄弁に語っているから面白い。臼杵西郊の深田の諸仏は之に比して時代は稍々後れ，平安朝に降ってからの作品たることは明らかで，直接に龍門の諸仏に比較する途はなかった。然るに大正六年浙江省杭州西湖の石仏を観るに及んで，臼杵の摩崖仏製作の様式は唐末から北宋に至る百年間栄えた呉越王錢氏の時代に成ったものと似通うものがあるのを認め，日支造仏史の一時期の代表されている事実を知った。我々は水野長廣両君に龍門の遺蹟から更に降つて唐末宋初の一世紀に於ける造仏をも探求せられて，浙江地方を経由した仏教芸術伝来の蹊径を明示され，石仏に認められる東亜文化史の全貌を明かにされんことを望んで已まない。今完成した本篇を公にするに當り，濱田君と共に支那内地の考古学的探検の第一歩を踏み出してから三十年間の京都大学を中心とした研究業績の進捗を通覧して感慨措く能はぬと共に，更に将来に冀望する所小少ならぬことを併せ述べて巻頭の辞に代える。昭和十六年六月小川琢治[16]」。(傍線及び旧字体から新字体への変更は筆者)。ちなみに，小川氏はこの後の昭和

16年11月15日に死去された。まさにこの序文は，偶然にも時宜を得たものであった。

ところで，小川・濱田両氏が試みた龍門石窟への小旅行から5年後，初めて小川氏による臼杵石仏の調査が実施されたことは，とても幸運なことであった。つまり，臼杵石仏の最初の学術的紹介が，日本人による中国石仏研究の黎明期に龍門石窟の調査を踏まえて行われたこと。全く最初は，小川氏の個人的な興味と調査から出発した豊後石仏研究であったが，その後さらに縁と造詣の深い濱田氏へ着実に継承された。事実『豊後磨崖仏』の序において，濱田氏は，初めは小川博士の誘導によって豊後石仏の研究する機会を得たこと，その後，多少の曲折を経ながらも，多くの優れた人材の協力を得てついに『豊後磨崖仏』の刊行に至ったことが言及されているが，その間，小川博士の始終直接間接にその研究に好意を寄せられたことについて明記されている[17]。このような理由から，結果的に京都帝国大学の組織的かつ先進の学術調査研究へと発展したことは特筆に値しよう。要するに臼杵石仏の調査研究に際しては，当時としては珍しい考古学・美術史学などを中心にした学際的な取組が実施された。まさに『豊後磨崖仏』は，その見事な結実であった。小川氏の石仏についての見解や成果については，後ほどまとめて言及することにして，ここではまず『小譜』の内容について述べることを優先しよう。

3）『小譜』の図版構成とその分析について

『小譜』の構成を確認する前に，それにやや遅れて刊行された大村西崖『東洋美術大観　第15　彫刻部』[18]を覗いて見よう。すると，きわめて興味深い臼杵石仏の図版が4枚（37から40までの図版。全て豊後国臼杵大日山磨崖像と記入。それぞれは①古園石仏，②山王石仏，③ホキ石仏第一群第一・二龕，④ホキ石仏第二群第一龕）収録されている。著書のタイトルからすれば，随分思い切った紹介ではあるが，彫刻部全74枚の図版中の4枚とはいえ，法隆寺，薬師寺，東大寺，法華寺，唐招提寺，興福寺と錚々たる名宝に続き，なんと国宝指定以前の臼杵石仏が紹介されているではないか。さらにその後には正倉院御物，平等院，中尊寺，金剛峰寺などの一流品の紹介となっていることから考えれば，その扱いはきわめて異例で破格である。つまり，大正7年当時すでに国宝級の扱い方となっていて瞠目せざるを得ない。大村氏の審美眼に敬服致したい。もっとも，『小譜』の発刊年に近いもので臼杵石仏の図版を探せば，大正5年天沼俊一氏撮影のものがある[19]。

さて，本題に戻ることにしよう。まず帙の表の題簽に『日本石仏小譜』（図1参照）と墨書されている。帙内の図版について順を追いつつ紹介しよう。

第一版　宝国院墓誌の拓本写真，即ち「小川駒橘妻方子白井氏嘉永癸丑二月十四日生大正甲寅九月八日没享年六十二葬於黒谷岡埼」と記す。

第二版　肥前国鵜戸岩窟不成就不動及左右脇侍。第三版　肥前国鵜戸岩窟不成就不動及右脇侍。第四版　肥前国鵜戸岩窟不成就不動及左脇。

第五版　豊後国大分稙田五尊窟。第六版　豊後国大分稙田五尊窟本尊（左右図）。第七版　豊

形の頭部は，三道部から胸の一部までが残存。第二十版は，小木と羊歯類植物に囲まれた吽形の仁王像（図15）。

4）『日本石仏小譜』の意義と小川氏の石仏に関する見解

以上の様に『小譜』は，写真で見ることのできる最古の当時の姿をとどめる第一級資料として位置づけることができる。前掲『日本精華　第九輯』の喜田氏の序に見られる様に，もともと知友間に頒布された私家版の図譜というべきものであった。すなわち，モノクーロム版20葉（6ツ切り），第一から第二十のうち，一は御母堂墓誌銘の拓本，第二から第四までが佐賀・鵜戸（殿）の磨崖石仏である。残りの全ては豊後の磨崖石仏を中心にして編集されている。最も白眉は，やはり古園の大日群像周辺の光景。すなわち，十七・十八版には，崩落した石仏群と林が確認される。林に覆われていた時期の遺跡を知る上では，最古の証拠写真である。撮影された大正3年頃の雰囲気がよく残されている。現在これより古い記録写真は見当たらない。おそらく，これ以前にはないであろう。ちなみに，大正十年発刊『仏教美術　第一巻第三号』所収の古園大日前の崩落した惨澹たる石仏の写真にもその間近に樹木が散見される（図16 [31]）。しかし『小譜』のそれに比べると，遥かに不鮮明で撮影範囲も狭い。また『小譜』は，岩屋寺の十一面観音立像の雄姿を知る上でもきわめて貴重な資料となっている。『豊州摩崖仏』所収の同写真と比べて見ても，『小譜』所収のそれの方が崩壊もやや少なく鮮明である。すでにこの頃からはやくも崩壊が見られるが，それでもまだ美的価値は完全に失われていない。濱田氏の報告書の中の写真（図17）よりも，はるかに鮮明である。つまり，岩屋寺を知る上では，最古の記録写真である。

ところで，次に小川氏の石仏研究の成果と見解について考えて見よう。

前記『龍門石窟の研究』の序文にも見られたように，小川氏は豊後石仏について「特に大分岩屋寺の諸像は天平時代の前後に国分寺が創設された頃（11世紀末と見る管見とは違う。詳しくは拙論「大分元町石仏群の成立年代について」注29参照）に，洛陽長安交通の盛んに行われて，大陸の仏教芸術の伝来したことを雄弁に語っているから面白い。臼杵西郊の深田の諸仏は之に比して時代は稍々後れ，平安朝に降ってからの作品たることは明らかで（早くて12世紀初から12世紀半ば頃と見る管見とは違う[32]），直接に龍門の諸仏に比較する途はなかった。然るに大正六年浙江省杭州西湖の石仏を観るに及んで，臼杵の摩崖仏製作の様式は唐末から北宋に至る百年間栄えた呉越王錢氏の時代に成ったものと似通うものがあるのを認め，日支造仏史の一時期の代表されている事実を知った。[33]」と言及している。

次に同様の趣旨の文章が，小城長郎著『深田の石仏』にも掲載されているので紹介しよう。

「京都帝国大学教授文学博士　小川琢治氏の説

氏は大正二年八月，別府にて開催された夏期講習会講師として来県されたのが縁となり，其の際始めて深田の石仏を探検され，意外な獲ものに一驚を喫し，其の後二回に亘り詳細な踏査

を遂げられ，「日本石仏小譜」といふ図譜を発行し，続いて「九州の石仏」と題し其の研究の結果を「国華」誌上に公表された。今便宜上博士の談として新聞紙上に公表されたものを左に摘録する。／

大分県下に於ては随分沢山な石仏群が存在してゐるが，特に作の優れた研究上面白いものは，先づ大分市の南郊元町岩屋寺にあるものと臼杵町の西一里半ばかりの深田の満月寺の石仏群である。そして其のいづれもが丘陵の一端の崖を磨いて其の磨崖の面に半肉，或は丸彫りに近い彫刻であつて，一見支那の河南の龍門や山西の雲崗の龕洞を見るが如き感がある（中略ママ）。

臼杵在の深田満月寺の遺蹟に在る石仏群は，先づ三つの群集に分つことが出来る。一は古園，二は堂ケ迫群，三は隠れ地蔵の群（＊当初の俗名が知られて面白い）であつて，いづれも弯曲した山の尾の根の磨崖に彫まれたもので，古園は其の口堂ケ迫が中程の北麓に南面し，其の奥に行きつまつた南麓に北面していゐるのが隠れ地蔵の群集である。此の地質は一帯泥熔岩で出来て居り，其の石質は疎らく軟かいが彫刻等にすると耐久性がある故に各石仏群は比較的よく其の線状を止めて残つている。（＊ここで，小川氏は地質学者としての真骨頂を発揮している）。堂ケ迫群には優作として弥陀三尊がある。形態表現何れも我藤原初期芸術の特色を存し，更に奥に至るに従つて時代が稍新しみを帯びて来て，隠れ地蔵群の如きは秀麗見るべきものがあつても皆藤原末期の作風（＊管見では，12世紀初から12世紀半ば頃。しかし，秀麗とされたその審美眼には感服）を存して居る。（以下略）[34]」。（句読点・傍線，及び＊印付の記述も筆者）。

5）小川琢治と濱田耕作

小川氏と濱田氏は，初めて京都帝国大学において前者が地理・地質学を，後者が考古学を開設した時のパイオニアである。当時助教授であった濱田氏は，大正２年から５年まで留学のため英国滞在。有光教一氏によると，その間，考古学研究室を監督したのは，朝鮮史の今西龍講師（のち教授，京城帝国大学教授）と地理学講座担当の小川琢治教授（のち理学部地質鉱物学科主任教授）で，ともに考古学に強い関心を持っていたという[35]。このように小川・濱田両氏は，職場においても緊密であり，共に龍門石窟を初めて訪問して以来，協力して日本における石仏の研究にも携わった重鎮である。とりわけ臼杵石仏の研究史上，両名は決して忘れてはならない。

ところで今日，考古学などの優れた研究者を対象とする学術文化賞に濱田青陵賞があるが，平成十年度は第十一回濱田青陵賞（岸和田市，朝日新聞社主催）に考古学者の甲元真之（熊本大学，54歳）が選ばれた[36]。この賞は，日本の科学的な考古学の創設に努めた岸和田市出身の濱田耕作（号，青陵）氏の没後五十周年を記念して始まったものである。ちなみに濱田氏は，日本の大学において，京都大学が初めて考古学教室を開設した時の立て役者である。大正末年の瑞典国の皇太子御夫妻[37]の豊後の石仏訪問の際に，小川・濱田両氏は瑞典国の皇太子御夫妻一行に随行されて案内をされているが，大分における地元紙は次のように伝えている。

大正15年10月9日付『豊州新報』夕刊（図18）

見出し「何れの石仏も天下の逸品　夫々批判的に御鑑賞　最高学者と御意見一致す　御鑑識の高きに感激　北欧殿下御観察感想につき両博士謹話」。

本文「瑞典皇儲殿下の石仏視察に対する御感想の一端を洩れ承はるべく小川，濱田両博士を訪へば，階下応接室に於て両博士はこもごも左の如く語られた皇儲殿下には豫て著書により，或は写真絵端書等により充分の御鑑識を供へられ，且つ高野山奈良等に於て殆ど同種類の石仏を御観察になられたので，別に特別の御下問に接した事はなかった。元町岩薬師像　深田の石仏では，堂ケ迫の集団仏は何れも逸品であると御褒賞。十三仏中の大日如来は，最も傑作との御批判があり，真野長者夫婦の石仏も御賞揚。蓮城法師像は，作が新しいと御判断遊され，宝匡部塔の如きは，頗る御感興を湧かせられたが，此の御批判御断定は，何れも我国の学者の説と一致する等，美術的御鑑識の高く存はすに敬服申上ぐるのは外はなかった。而し本町深田両共保存の不完全な事に御遺憾の様で，且つ彼の木棚や制札が，貴重なる比して極めて非美術的である為，堂ケ迫の集団仏や十三仏の制札の如き，其位置の変更地点迄も御留意を垂れられる。尚大日如来像の如きは，其付近を厳重詮索，一片の破片も蒐集を怠らない様したいものだ，との御言葉もあった云々。[38]」（句読点及び旧字体から新字体への変更は著者）。

ところで，記事中の瑞典皇儲殿下とは，後のグスターヴ6世アードルフのこと。グスターヴ6世アードルフは，極東の事柄に関心の強い考古学者としても有名である。その見識の高さは，前記文中からも察せられる。ちなみに後日談として次の興味深い事柄が知られている。すなわち，1949（昭和24）年11月3日。スウェーデン科学アカデミーは1949年度ノーベル物理学賞を湯川秀樹氏に授与した。日本人初のノーベル賞であった。ここで想起されることは，この式典で博士に賞を授与した人こそ，当時スウェーデン国王代理の皇太子，後の国王・グスターヴ6世アードルフであった。昔日，小川・濱田両博士は皇太子の豊後石仏見学に際してわざわざ随行され案内された。おそらく，湯川秀樹氏にノーベル物理学賞を授与した際には，かつて御尊父・小川琢治氏と共に豊後石仏を訪問された時の回顧談にも及ばれたものと察せられる。

6）小川家墓地と臼杵石仏五輪塔

『小譜』所収図版一には，小川家の墓地が「黒谷・寶国院」にあることを記している。調査の結果，現在の小川家の墓地は，黒谷の寶国院名の寺にではなく，黒谷の西住院に存在することが判明した[39]。見付け出す際の目標は，五輪塔。つまり，かつて小城氏から，小川博士は「聖塔の古趣を帯びたるを殊に愛せられ逝きし両親の墓標にせばやと態々此地の石工に命じ同型のもの二基を模造さら遙々京都に送って東山の先塋に建設せられた[40]」と紹介された，臼杵中尾の丘に建つ一石五輪塔の形式であった。

確かに，それは存在した。3基並んだ五輪塔（図19）。中央が一段と高く，その両脇はやや小振りで低かった。すなわち中央の五輪塔の地輪部正面に「小川琢治　小雪」と並んで刻まれ，

裏面には建立者としてのその子息たち，すなわち四兄弟の氏名が順番に刻名。（治金学者）小川芳樹，（東洋史学者）貝塚茂樹[41]，（物理学者）湯川秀樹，（中国文学者）小川環樹（図20）。

ともあれ，実はこの五輪塔こそ，豊後石仏調査に際し有縁の臼杵の職人に，しかも臼杵中尾の五輪塔を模して造らせた小川家の墓標であった。

なお，小川家墓地内の配置は。正面中央の五輪塔から向かって右にやや偏平な五輪塔「小川橘翁弘化（1844）元年甲辰正月三日生大正十一（1922）年壬戌三月三十一日没」。つまり琢治氏の御尊父の墓碑。また正面中央に向かって左にやや偏平な五輪塔「小川駒橘妻方子白井氏嘉永葵丑（1853）年二月十四日生大正甲寅（三，1914）年没」。つまり琢治氏の御母堂の墓碑。ちなみに，３基の墓碑に向かって右手前の脇に（大正）丁巳（1917）十二月八日建立「小川家墓地」の碑文がある。

正面中央に一段高い五輪塔・小川琢治墓石。正面梵字下の右に「小川琢治」左に「小雪」と刻名。裏面に「昭和十七（1942）年十一月十五日　男　芳樹　茂樹　秀樹　環樹　建」。正面向かって右側面に「文敏院正余常念如舟居士[42]　昭和十六年十一月十五日　享年　七十二歳」と刻まれている。

7）おわりに

以上，小川琢治博士の諸業績中，極めてまれな『図譜』発刊の動機と，博士の石仏研究の意義などについて，管見の及ぶ限りの言及を試みてきた。すでに指摘した様に，まさに大正期は，日本における石仏研究（あるいは仏像研究）の黎明期と呼ぶべき時代であったということである。そして，その先覚者として小川琢治博士を挙げることについては，だれも異論はないであろう。筆者は，そのような意味で，小川博士に敬意を捧げつつ，同時に，石仏（石像）研究史上の優れた業績を称えるために，顕彰に努める必要のあることを痛感する。かつては，棚田が見える丘陵地や林の中に臼杵石仏群があった。そのような景観をこの『図譜』は，克明に記録している。しかも，最古の記録写真として残された点において，まさに希少価値の高い資料といえよう。臼杵石仏研究史上，不可欠の基本資料であるということはいうまでもない。さらに，大正３年発表の「九州の石仏」は，本来は仏教美術の専門ではない小川博士の貴重な石仏に関わる論文であるが，尊名比定に図像学的解釈を導入，卓見を披露されている。現在の研究水準から見ると多少の問題はあるものの，その方法論は仏教美術史学の常道である。しかも，小川博士の態度は，きわめて謙虚にして堅実である。以下に，そのような論説の一端を紹介しよう。すなわち「（前略）九州に於いて発見せられる諸石仏は何れも色彩を石面に施して其荘厳の美を加えたるものなるが，此に造像当時のままに其色彩の美観を保存せるは最も珍重とすべきなり。余は芸術観賞の素養なく，また仏教研究の目的を有せざるも，偶然これらの石造彫刻を発見と共に種々の疑問湧出し，特にかくの如く自然露頭に彫つけてその製作の現地に永遠に保存せられたる作品の，独り考古学上に重要なるのみならず九州における仏教伝播の沿革を知り，

文化芸術の径路を察するに裨補する所小ならざるを想い，獲たる所の諸の石仏の写真説明を紹介するに当たり，敢て自ら揆らず試みに見聞せる所に就き梗概を挙げて博雅の一粲を博せんするものなり。[43]」と。

この後，考古学・美術史学・仏教学などの隣接科学を駆使して，組織的石仏研究を推進されたのは，京都帝国大学の濱田耕作博士であった。かつて，小川・濱田両博士は，共に瑞典皇太子を臼杵石仏に案内されたことがあった。また，小川博士は，濱田博士の英国留学中は，一時その考古学教室を預ったこともある。実に，両者の良好な関係の賜物である。その結実は，豊後石仏研究の金字塔というべき『豊後磨崖石仏の研究』として輝いている。それは今なお水準の高い研究書であり，また石仏研究において必須の基本資料である。小川博士の石仏研究史上の業績は，大正初期において，まさしく画期的であったと言うことができる。

付記　『日本石仏小譜』の調査と撮影に際しましては，京都大学人文科学研究所図書掛り・織田陽氏に御便宜と御高配を賜りました。また，拙論に掲載させて頂きました小川琢治博士の御写真につきましては，京都大学人文科学研究所の小南一郎教授から懇切なる御教示を賜りました。さらには，貝塚美代（貝塚茂樹博士・令夫人）氏にも調査に際しましては，御協力・御厚情を賜りました。お世話になりました関係各位に重ねて衷心より御礼申し上げます。

注

1　仲嶺真信「石仏研究の黎明と臼杵石仏」（臼杵石仏国宝昇格記念号『臼杵史談第86号』臼杵史談会　平成７年）。同「大正期における臼杵石仏の研究について」（『芸術学論叢第12号』（別府大学文学部美学美術史学科　平成８年）

2　小川琢治「九州の石仏　一・二」（『国華292・293号』国華社　大正３年）

3　伊東忠太「支那山西雲岡の石窟寺」（『国華197号』国華社　明治39年）
同「支那山西雲岡の石窟寺（承前）」（『国華198号』国華社　明治39年）

4　大村西崖『支那美術史彫塑篇』国書刊行会　大正６年

5　大村西崖『東洋美術大観　第15　彫刻部』審美書院　大正７年

6　濱田耕作『豊後磨崖石仏の研究　京都帝国大学文学部考古学研究報告第九輯　大正13年４月－14年３月』京都帝国大学　岩波書店　大正14年

7　喜田貞吉「日本精華第九輯豊州摩崖石仏の発刊を聞きて」（工藤利三郎『日本精華第九輯豊州摩崖石仏』精華苑　大正十年）参照。なお喜田貞吉氏は，1871年生1939年没。当時は京都帝国大学文学専任講師。文献史料によって日本古代史を研究する卓抜な古代学者。喜田氏は，大正８年１月には個人雑誌『民俗と歴史』を創刊（「炭焼長者譚」『民族と歴史第五巻第二号』あり）。角田氏によると，同僚の内田銀造教授（1872－1919）が大正８年３月に逝去されたので，喜田博士はやむをえず大正９年７月に京都帝京大学の国史学の教

授を引き受けられたが，心は専ら研究と『民族と歴史』の刊行にあった。角田文衛「神原政職…日本考古学界の彗星…」（角田文衛編『考古学京都学派＜増補＞』（雄山閣出版　1997年　311頁）参照。

ところで，工藤氏は，奈良登大路の氷室神社の東で写真屋（精華苑）を営んでいた。氏は，廃仏毀釈の大嵐が奈良の古寺を席巻したあとの古美術を撮影した人で，氏の撮影した当時の乾板は現在の高畑の奈良市写真美術館に所蔵されている。曾津八一が，奈良美術の研究へと進展して行ったのは，工藤氏撮影の写真を所有していた趣味人・淡島寒月（1859－1926）との交流が契機となっている。（吉村怜・大橋一章『曾津八一　その人とコレクション』早稲田大学出版部　1997年　参照）

8　『日本石仏小譜』は大正３年に身近な人達に頒布された私家版。京都大学では（１）文学部国史学教室閲覧室に内田銀三氏（1872－1919）寄贈本（番号300713）もあるが，史料館に未整理のまま保管されていて未見。この他に京都大学人文科学研究所閲覧室に松本文三郎氏（1869－1944）寄贈本（番号931253）がある。ただし奥付はなく，墨書の題が直筆かどうか，また解説文の有無・出版元・撮影者も不明。玻璃版。現在は東洋文献学研究センターへ移管。なお小城長郎氏によると，松本文三郎氏は，大正13年臼杵石仏を視察。「満月寺の十三仏は盛唐のものと思はれる。日本ならば矢張り天平年間で今から一千二百年位かね，そしてそれは密教以前のものらしい。又大日如来であるか否かは遽かに断定することは困難である。之を口碑や伝説に依って大日如来であるとしたり或は何々の系統であるとするのから種々の点に窮屈な点があるのではないかと思ふ。兎に角私は支那に於ける龍門の石仏も見たが，能く之と似て居り又敢て遜色なきものであることを信ずる。云々」（『深田の石仏』203－204頁）

9　『明治人名辞典Ⅲ　上巻』日本図書センター　1944年　21－22頁。原本は，成瀬麟・土屋周太郎編『大正人物誌』八紘社　大正２年）。

10　小城長郎『深田の石仏』私家版　昭和４年　44頁

11　監修者　上田正昭・津田秀夫・永原慶二・藤井松一・藤原彰『コンサイス日本人名事典』三省堂　1994年　274頁参照

12　「座談会　先学を語る ── 小川琢治博士 ── 」『東方学54輯』東方学会　昭和52年

13　この書物の序文にも経歴・業績を次のようにまとめている。すなわち，「序　昭和５年己巳，五月二十八日，京都帝国大学理学部教授小川琢治博士第六十一回の生辰にあたる。因りて僚友門下相謀り，式を挙げ宴を設け，贈るに銅鋳肖像と記念論文とを以てし，其の学行を頌し，その康寧を祝す。惟ふに博士は紀州田辺りの儒家に生まれ，刻苦積学，明治二十九年，東京帝国大学理科大学地質学科を卒業せり。嘗て以為へらく，本邦の地質構造を明にせんと欲せば，宜しく先づ支那大陸の地質を明にすべきとなりと。清国義和団の変，命を奉して山東・直隷・内蒙古・満州を跋渉し，遂に其の日本地質構造論を完成せり。博士又地理の学を愛し，其の学生時代，日清没後，東京地学協会の依託を受けて，台湾の地

理を窮むるや，已に能く外人の不逮を捕ひ，且新地理学の古地誌に資るを利とするを悟れり。故に支那古地誌に於いては夙に深得あり。爾来旁に博く人文に関する古今東西の典籍材料を研鑽して，異日の基本を培植えせり。是れかの独逸人「リヒトホーヘン」が地質学者を以て支那の地理を窮め，その人文現象を論ずると相類するものあり。明治四十年，韓国総監府の命により，間島を調査し，翌年夏，京都帝国大学文学部教授に任ぜられ，地理学講座を主り，大正十年冬，理学部に転じて，地質学講座を主る。其の文学部に在ること十又三年，理学部に在ること亦已に八年，交遊内外に亘り，及門高材逸足に富めり。論文集の編せらるるや，稿を属する者凡五十五人，科は文・理を分ち，蒐録部を殊にし，各々巨製をなせり。博士徳業の卓異，亦由りて見る可きなり。今博士老を以て帰休せんとす，而して気力猶壮に，視聴衰へず，寿考の徴，鶴算椿齢も虚企と為さず。博士の不朽なる所以のもの，固より其の学術に存して，年齢に在らずとも雖も，敢て其の長久ならんことを冀ふもの，豈ただ交朋弟子の私情のみならんや。斯の新集を成すは即ち古人の所謂頌祷の意なり。昭和五年五月二十八日　小川琢治博士還暦記念祝賀会」（『小川琢治博士還暦記念史学地理学論叢』著者「石橋五郎」弘文堂書房　昭和５年）参照（旧字体は新字体へ筆者が改めた）。

14　注１参照

15　水野清一・長廣敏雄『龍門石窟の研究』座右宝刊行会　昭和16年

16　注15参照

17　注６参照

18　大村西崖『東洋美術大観　第15号　彫刻部』審美書院　大正７年

19　『仏教美術　第一巻第三号』（仏教美術社　大正十年四月十一日）所収

20　鵜戸石仏については，『肥前相知　鵜殿石仏　── 付立石観音・花峰の観音 ──　九州の寺社シリーズ11』（九州歴史資料館　平成３年）がある。

21　小野玄妙「大分県佐賀両県下の石仏」（『大乗仏教芸術史の研究』大雄閣　昭和２年　393頁）参照。

22　注２「九州の石仏　二」参照

23　注21参照

24　注21参照

25　注２「九州の石仏　二」参照

26　注２「九州の石仏　二」参照

27　注21参照

28　注７『日本精華第九輯』参照

29　元町石仏については次の拙論がある。仲嶺真信「大分市元町石仏群の成立年代について」（『芸術学論叢11号』別府大学文学部美学美術史学科　1994年）

30　十一面観音については次の拙論がある。仲嶺真信「絶滅寸前の岩屋寺石仏　上・下」（『大

分合同新聞朝刊』1995年5月12日・13日（日・月）付）において，文化財として価値の高いことについて詳しく述べた。

31 『仏教美術　第一巻第三号』（仏教美術社　大正十年四月十一日）参照

32 仲嶺真信「臼杵石仏群」（賀川光夫編『臼杵石仏』吉川弘文館　1995年）／同「臼杵石仏群の造営年代とその背景について－山王・ホキ三尊・古園を中心とした問題提起－」（『史学論叢第25号』別府大学史学研究会　1995年／同「臼杵ホキ石仏第二群第一龕の成立年代について」（『仏教芸術229号』毎日新聞社　1996年）

33 注15参照

34 小城長郎著『深田の石仏』（昭和４年発行・ガリ版刷136－139頁）

35 有光教一「京大考古学教室創立の頃－濱田耕作を中心として－」（角田文衛編「島田貞彦の生涯と業績」にも「当時，考古学担当の濱田助教授は，ヨーロッパ留学中であった（大正２年３月より大正５年３月まで）。濱田助教授の留守中は，考古学教室の事務は，小川琢治教授（地理学）の監督の下に今西龍講師が担当していた。その時分の研究室は，地理学教室の一隅にあったが，小川教授は実際上は考古学教室を宰配し，島田は小川教授に仕える形で出勤していた。」（前掲『考古学京都学派＜増補版＞』83頁）参照。

36 『朝日新聞　1998年７月26日付朝刊「ひとの欄」参照』

37 瑞典国皇太子については次の論文がある。角田文衛「スウェーデン国王グスターヴ６世の逝去」（『ヨーロッパ古代史論考』平凡社　1080年　465－466頁）参照。

38 大正15年10月９日付『豊州新報』夕刊（大分合同新聞社所蔵マイクロフィルム）

39 現在小川家墓地は，『小譜』に見える寳国院ではなく黒谷西住院に存在する。ちなみに『小譜』調査の際に，所蔵する京都大学人文科学研究所において図書掛りの織田陽氏に寳国院名の寺の所在を尋ねた。織田氏もご存じなかったが，さっそく調べて頂いた。しかし，この名称の寺は現在黒谷墓地には存在しないということであった。そこで，直接小川家所縁の方々に伺うことに致し，ついに貝塚美代氏から御教示を賜りました。改めて，御協力と御高配に深謝致します。なお，角田文衛氏によると，小川琢治氏と島田貞彦氏とは終生親密な関係にあったという。つまり，和歌山出身の小川氏は，京都市に菩提寺や墓所をもっていなかったので，京都出身の島田氏が，小川氏の依頼によって自分の菩提寺の金戒光明寺西住院に小川氏を紹介し，小川氏は金戒光明寺（黒谷）の墓地に豫め夫妻の墓を営まれた。（前掲『考古学京都学派＜増補＞』95頁）参照。

40 注10参照

41 貝塚美代氏の御教示に従って，墓地所在の黒谷西住院を訪ねたところ，御住職は御高齢の上，御脚が御不自由ということで御案内・御同行は難しかった。たまたま御住職と知己の植木職人が所用で居合わせていので，筆者はその職人とともに現場に急いだ。迷わず発見したので，職人は驚いた。もともと，筆者は凝灰岩製の五輪塔を目印にしていたのですぐに見い出せた。あたりでも抜群の美しい五輪塔であった（写真）したがって，発見には時

間はかからなかった。

42　ちなみに御戒名中の「如舟」とは，東京の地質調査所時代の書斎の号。蘇東坡の「戯子由」という題の詩に由来する。つまり「宛丘先生長如丘，宛丘学舎小如舟，常時低頭誦経史，忽然欠伸屋打頭，斜風吹帷雨注面，先生不愧旁人羞，任従飽死笑方朔，肯為雨立求秦優，眼前勃磎何足道，処置六鑿須天游」とあるのを取って「小如舟書屋」と命名され，ずっと最後まで使用されたという。「先学を語る　小川琢治博士」（『東方学　第54条輯』東方学会　昭和52年）及び中国詩人選二集５・小川環樹注『蘇軾　上』（岩波書店　1979年）参照，下線部は筆者加筆。

43　注２「九州の石仏　一」

図版出典

１『日本石仏小譜』　２『日本精華　第九輯』　３『東方学54』　４・19筆者撮影

５～６『日本石仏小譜』　17『豊後磨崖石仏の研究』　18『豊州新報』　20『東方学95』

図１　「日本石仏小譜」表紙

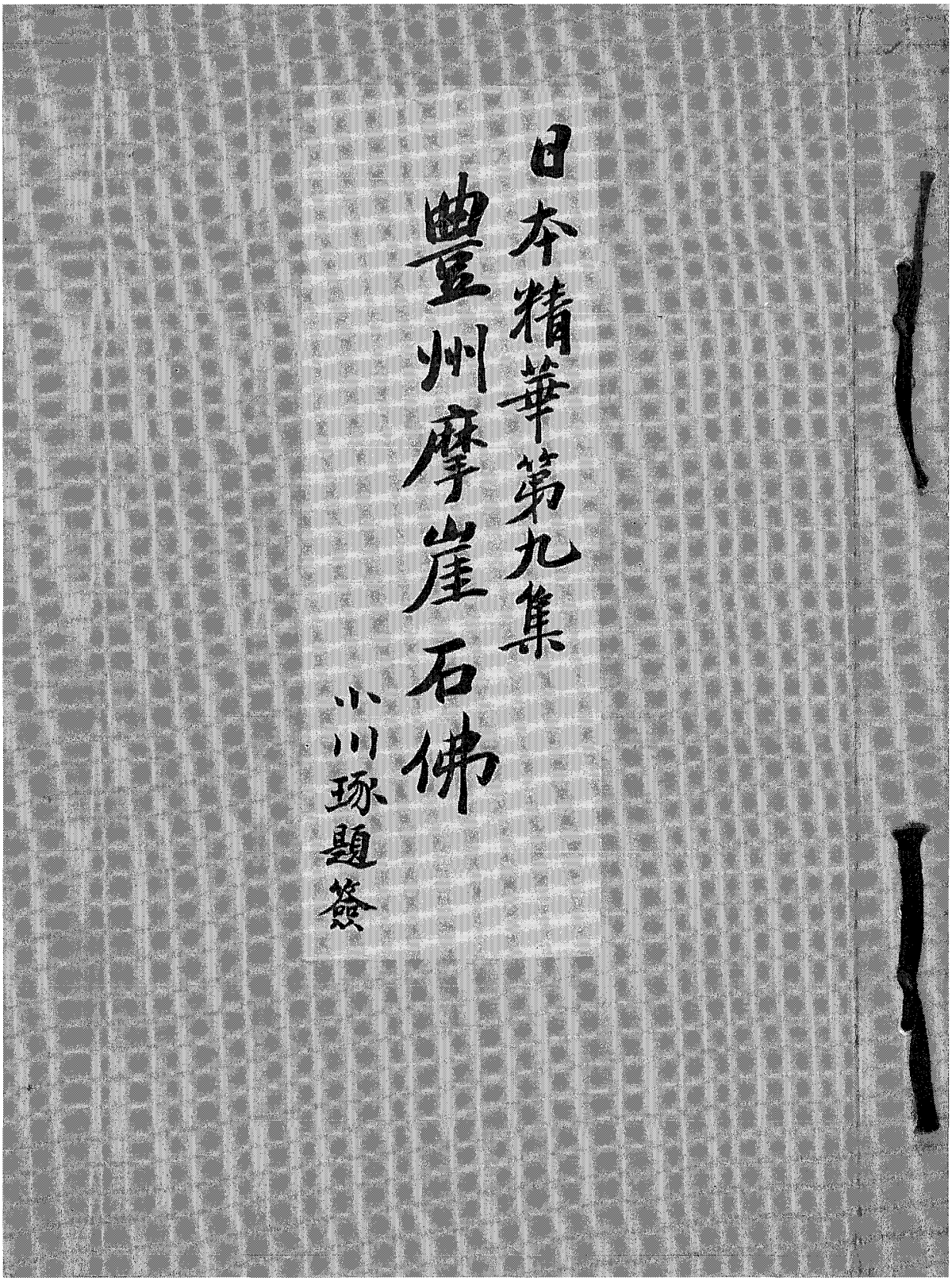

図２　「日本精華第九集」表紙

図３　小川琢治博士

図4　小川家墓地

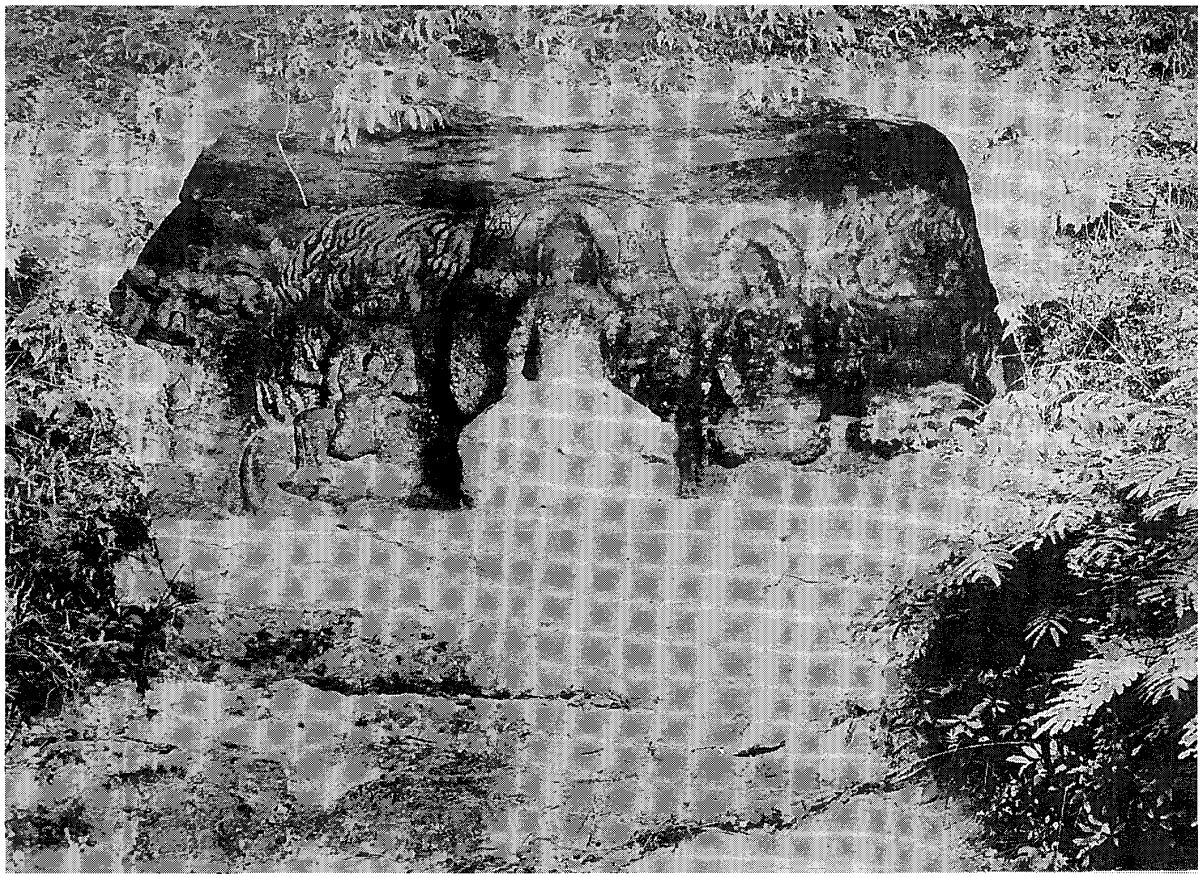

図5　植田五尊窟

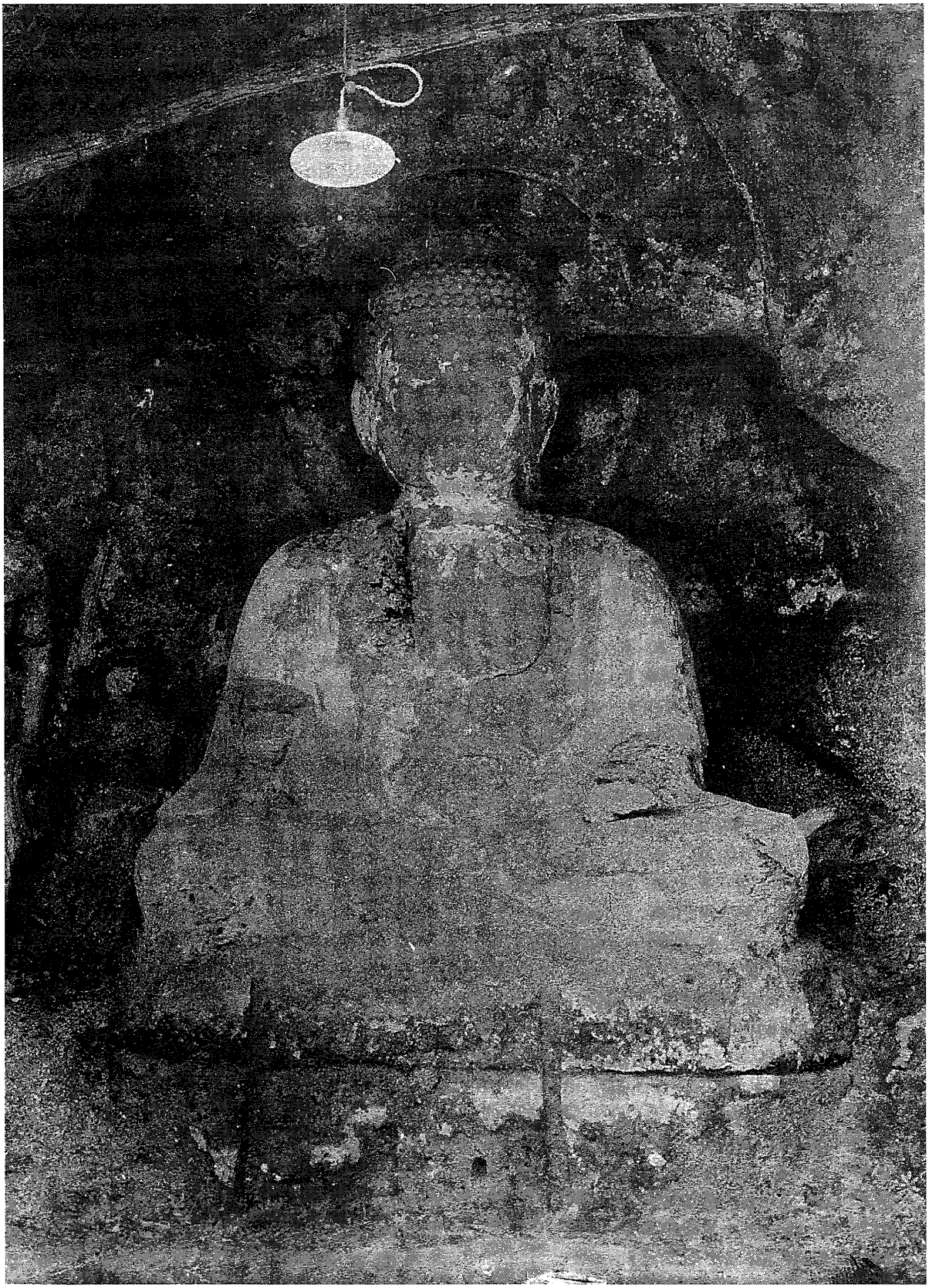

図6　岩屋薬師（元町薬師）

図７　十一面観音（岩屋寺）

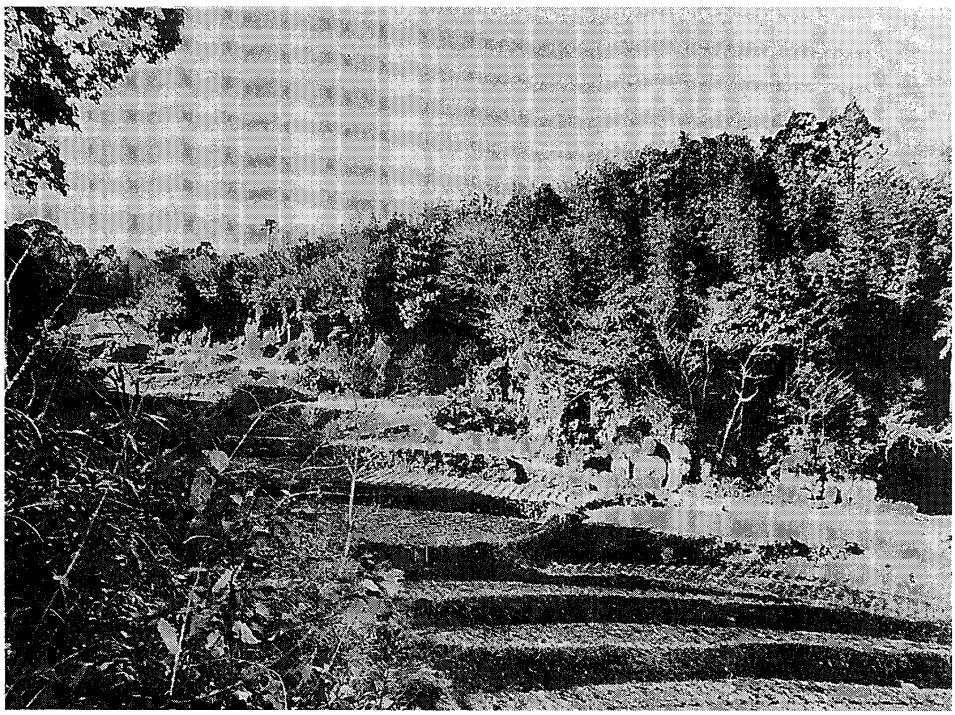

図８　堂迫全景

図９　堂迫阿弥陀三尊

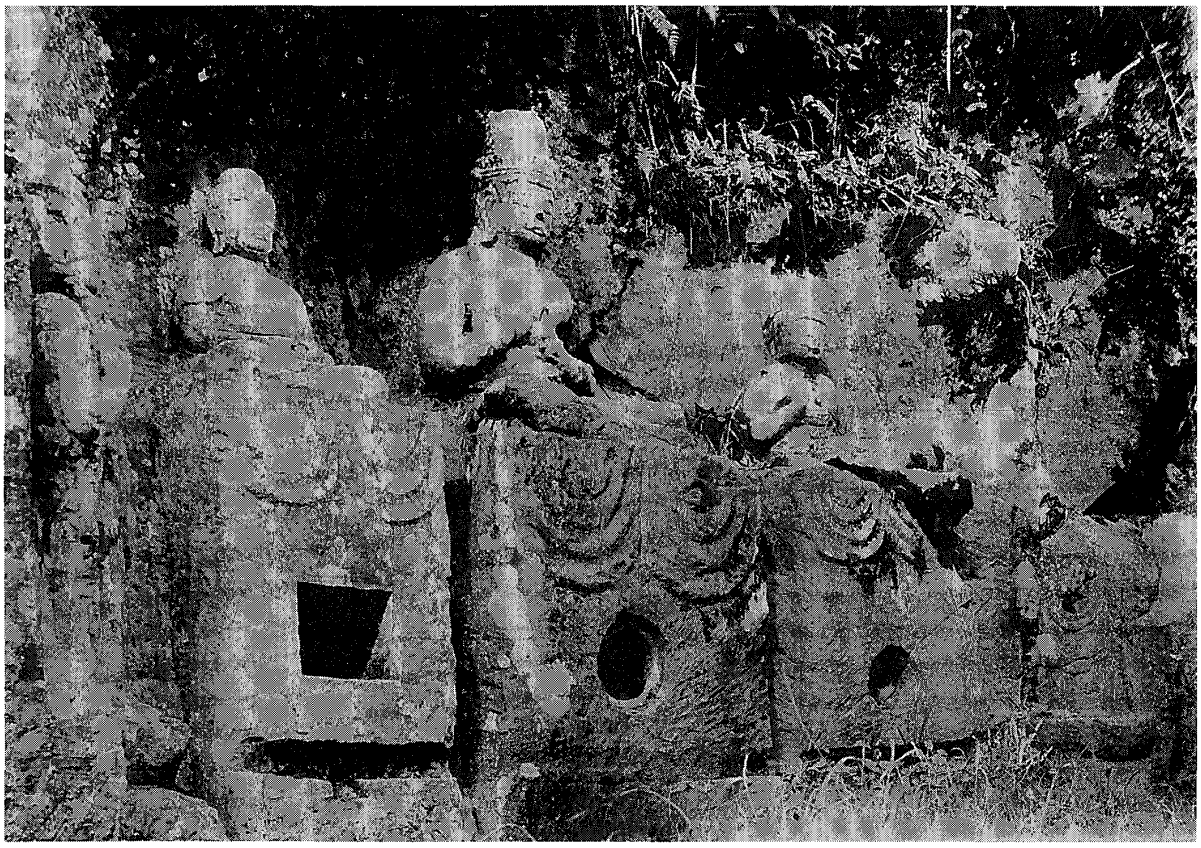

図10　堂迫大日如来三尊

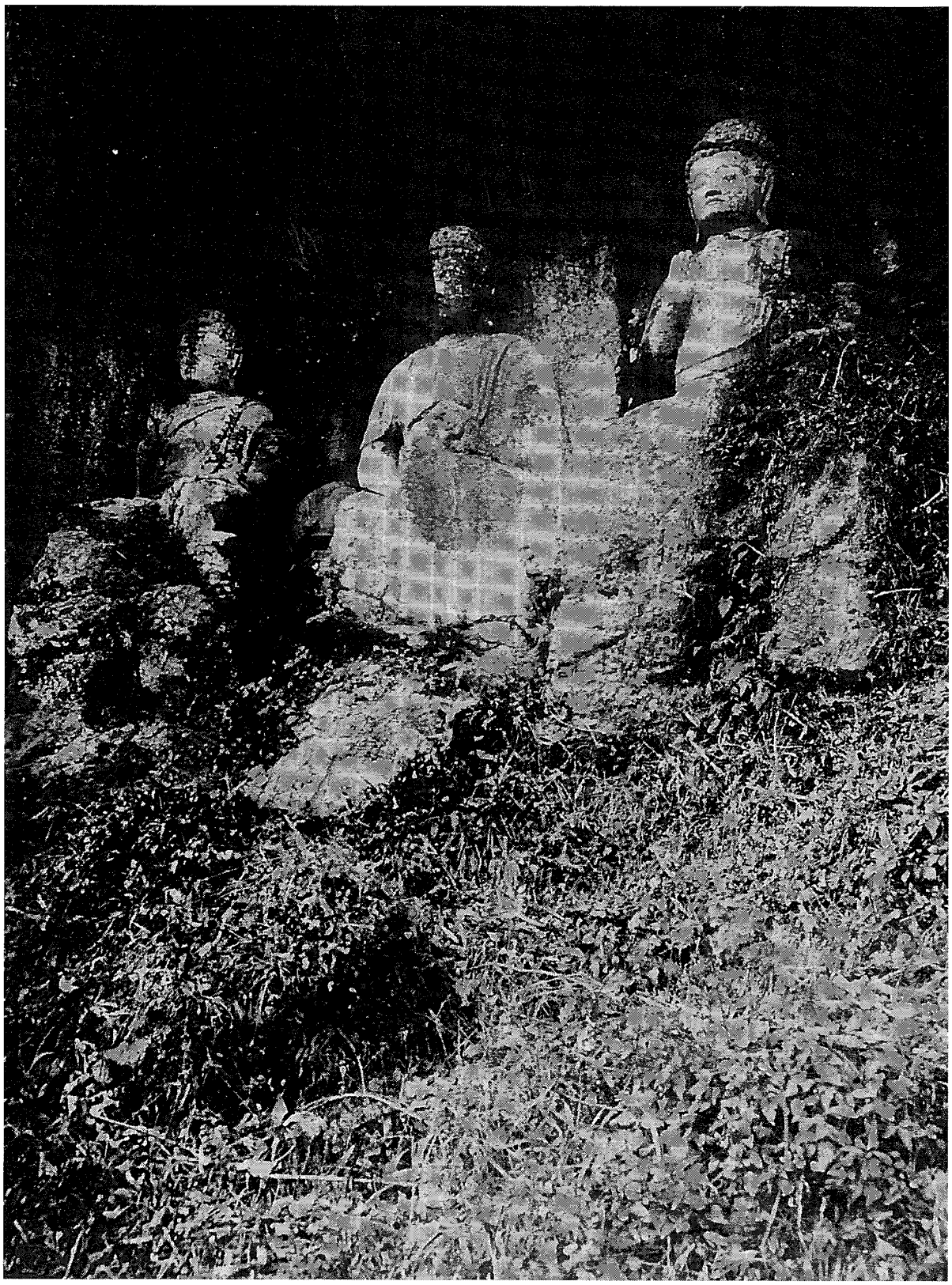

図11　堂迫三尊

図12　俗称隠地蔵（山王三尊）

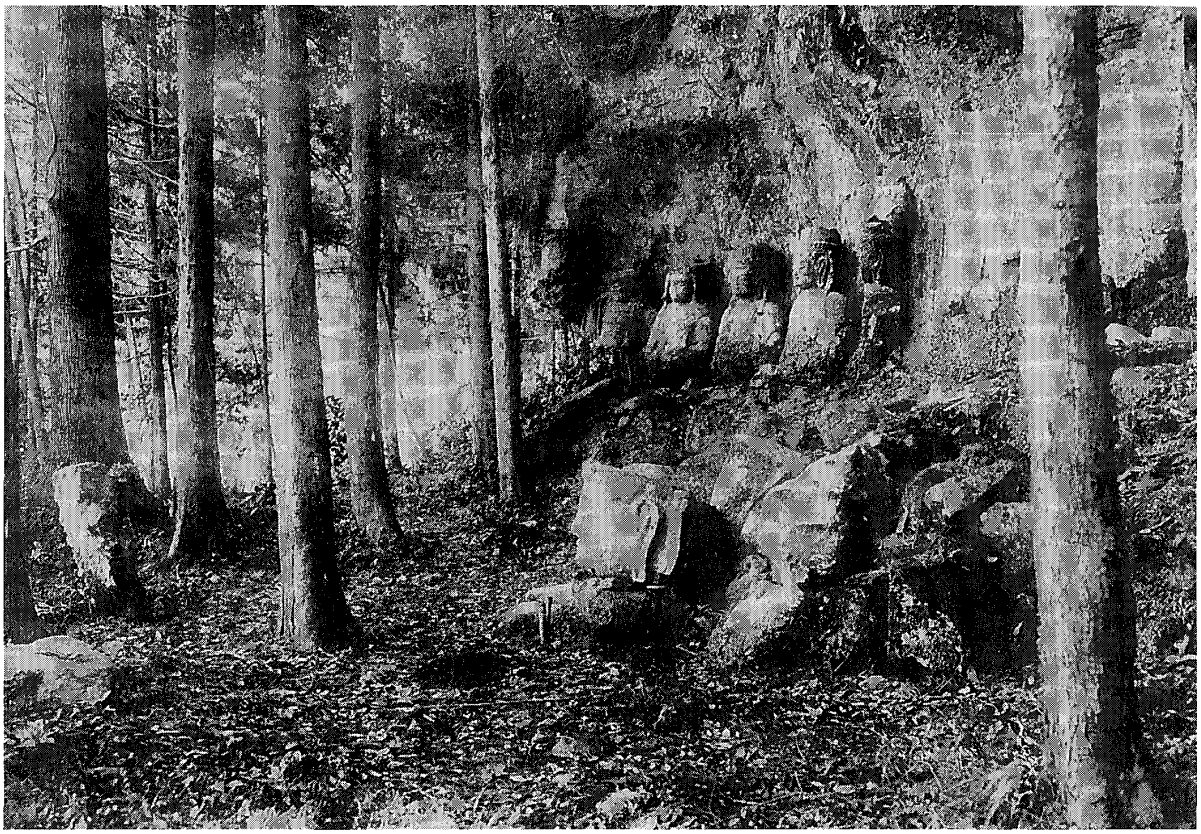

図13　古園十三仏

図14　古園十三仏

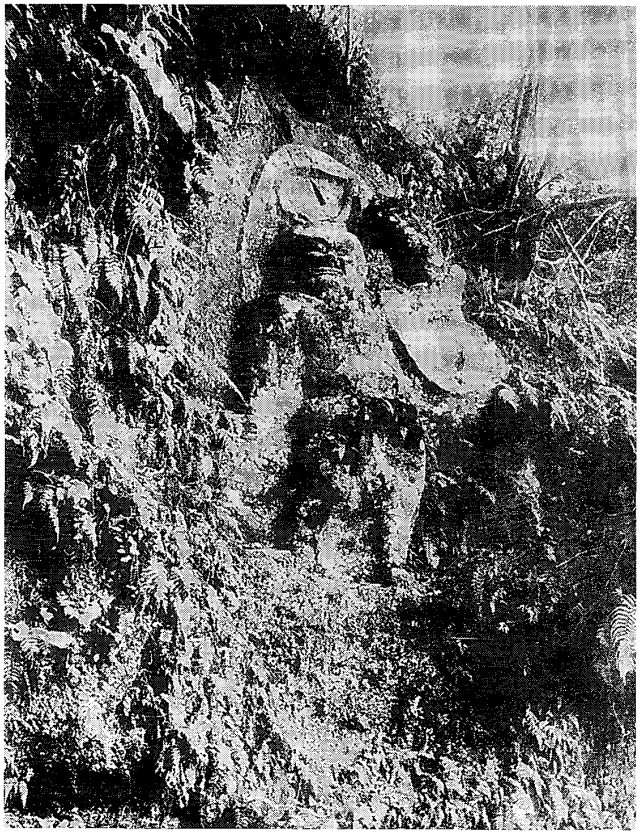

図15　古園仁王（吽形）

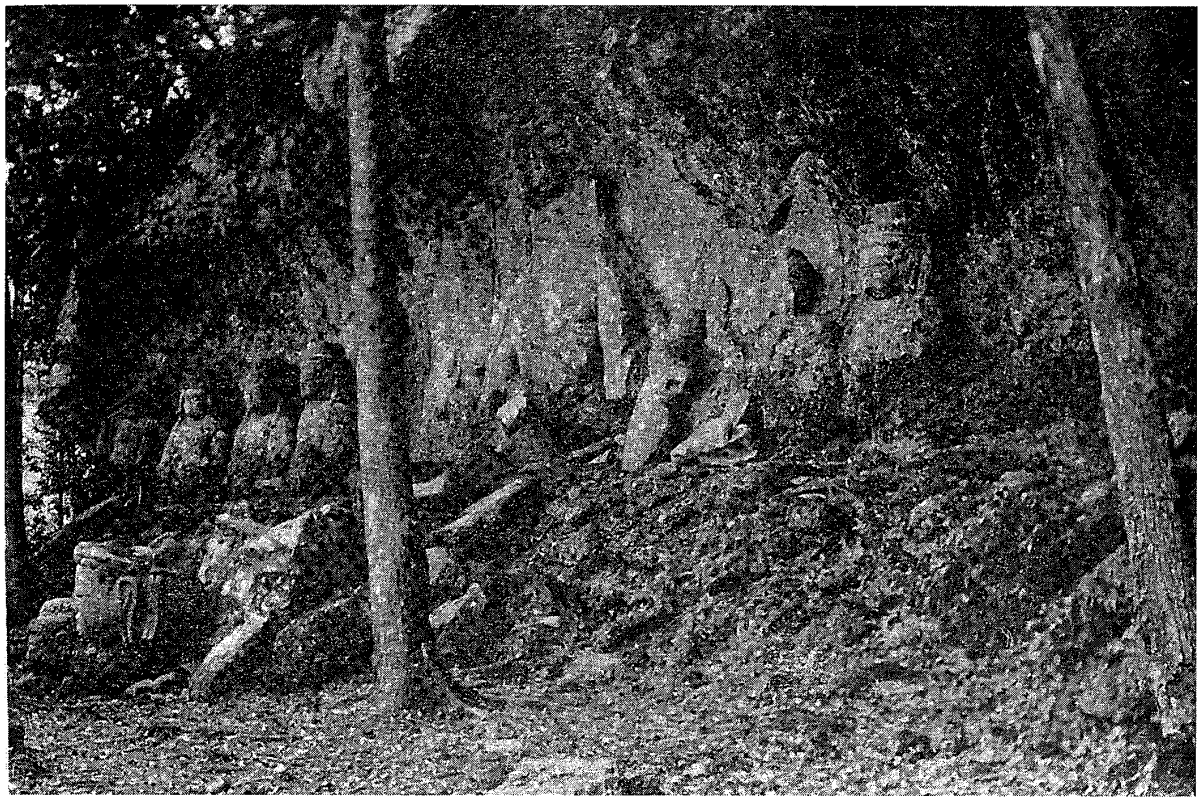

図16　古園大日群

図17　岩屋寺十一面観音

豐州新報 夕刊

瑞典皇太子同妃兩殿下

銀絲と降りそゝぐ 秋雨の中を三大地獄御巡覽

沸々と煮え立つ鶴見地獄 眞紅と染まる血の池地獄 碧み切つた海地獄等を

之れは天下の奇觀なりと御感賞

北歐の國賓瑞典皇太子同妃兩殿下を御迎へした大分縣民は歡喜と光榮の絶頂に達し千古に輝く豐雨の地に領まる文化の跡もゆくりなく御親察の機會を得又一入の誇りとする所である七日大分市元町及び白杵深田石佛の御親察を遊ばされ大友の築城龜城公園に御足印を刻せられた兩殿下に於かせられは同夜御旅館龜の井に於て翌後御成り第二日の闌らかな御夢を結ばせ給ひ明くれば十月八日豐南の空も感激の極みが朝來銀絲の如き秋雨はそぼ降り又一入豐南の秋色に情趣を添へ詩的の別府溫泉を淨化されたー此の日兩殿下には逗日の御疲れもけさせられず御豫定の如く午前九時半御一行と御同列に銀絲と注ぐ秋雨を縫はれ給ひ天下の奇觀血の池、海、鶴見の三大地獄を御巡覽遊ばされた

何れの石佛も天下の逸品

夫れ〳〵批判的に御鑑定 最高學者と御意見一致す

御鑑識の高きに感激

御感想たつき兩博士謹話

不完全

瑞典兩殿下

武藤長商教授と 前永井 知事に御陪食

武藤氏にワサイト一等勳章 永井氏に御親署の御寫眞下賜

兩氏は光榮に感泣す

深田の

處殿下たゞ御一人 おしのびで御散策

友禪反物や扇子を 御手づから御買上

別府名產お愛に御往目

國情を

胡蝶のやうな 少女の舞踊に 御感興殊に深く

夫々記念品の御下賜

純日本服が御氣に召した

御寫眞

童謠と舞踊を 殿下拍手で御賞讃

お伽倶樂部の光榮

武藤氏は寫眞を獻上

一家一門の

永井氏

白杵町の 熱誠な歡迎

殿下より有

新年勅題

海上風靜

新任田寺知事

木下前代議士の辭縣

古器物獻上

南善吉氏

拜謁仰付らる

白杵公園に於ける瑞典皇太子同妃兩殿下御一行の記念撮影（右）（中）（下）

図18　豐州新報　大正15年9月9日　夕刊

図19　小川琢治博士の墓石

図20　小川琢治博士と四男環樹